

「楽園に入った強盗」井上隆晶牧師

詩篇 22 篇 13～22 節、ルカによる福音書 23 章 32～43 節

①【キリストの苦しみの神秘】

ゴルゴダの丘に三本の十字架が立てられました。イエス様を中心にして二人の犯罪人が、一人は右にもう一人は左に十字架につけられました。そのとき、イエス様は父なる神に祈りました。「父よ、彼らをお赦し下さい。自分が何をしているのかわからないのです。」(24 節) 議員たちはあざ笑い「他人を救ったのだ。もし神からのメシアで選ばれた者なら、自分を救うがよい。」(35 節) といい、兵士たちも侮辱して「お前がユダヤ人の王なら、自分を救って見ろ。」(37 節) といい、犯罪人も「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。」(39 節) と罵りました。彼らはイエス様が多くの奇跡を行い、死者をよみがえらせたことを知っています。この言葉には罵りだけでなく、奇跡に対する期待と、それを裏切られた怒りがまじっています。しかしイエス様は十字架から降りず、奇跡を行いません。もしキリストが十字架で苦しまなかったら、私たちの信仰はまったく異なるものになっていたでしょう。主の苦しみは自発的な苦しみでした。「誰も私から命を奪い取ることは出来ない。私は自分でそれを捨てる。」(ヨハネ 10 : 18) といわれたからです。使徒信条は「ポンティオ・ピラトのもとに苦しみを受け」と「苦しむ」という言葉を入れています。ユダヤ人たちは苦しみが無くなるのが救いだと思いい、この世のカルト宗教はそろって苦しみからの解放を約束します。しかしキリスト教は苦しみからの解放を約束しません。「あなたがたには世で苦難がある。しかし勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。」(ヨハネ 16 : 33) と主は言われました。苦しみは本来、神様がお造りになった世界にあってはならないものです。しかし人間の墮落と共に苦しみは入ってきました。苦しみはこの世では無くなりません。墮落したこの世界では不可能です。そこで神様は人間を奇跡によって救うのではなく、人間の苦しみを共に連帯するという方法で人を救おうとされたのです。

②【右と左の強盗の運命は分かれてしまった】

犯罪人の一人はイエス様を罵りましたが、もう一人の犯罪人はこう言いました。「お前は神をも恐れぬのか、同じ刑罰を受けているのに。我々は自分のやったことの報いをうけているのだから当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。」(40～41 節) そして「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、私を思い出して下さい」(41～42 節) と言いました。その時、イエス様は「はっきり言うておくれ、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」(43 節) といわれました。楽園とは天国、神の国と同じ意味です。そこで教会はこの右の強盗は天国に上げられ、左の強盗は地獄に落とされたと解釈しました。東方教会では、ラ

テン十字架とは違う、スリーバー十字架を用います。キリストの足代の木が斜めになっているのは、右の強盗は天国に上げられ、左の強盗は地獄に落とされたことを現しているのです。全ての人が苦しみますが、その苦しみの中で人は右と左に分かれてしまうことを教えているのです。一方は自分の罪を認め天国に入りますが、もう一方は、苦しみを自分の周りの人や神のせいにして地獄に行くのです。

●昔の祈祷文の中にこのように書かれていました。

・「狡猾なる蛇はわたしの中に罪を見て、罪を行うのを助けるように働き、わたしが滅びるのを喜んでいます。」悪魔は私の中に罪を見つけると、ますます罪を犯すように助けるといいます。もし私の中に罪を見つけなければ悪魔は何もできません。しかし私の心の中に貪欲、妬み、怒り、嫉妬、恐れ、劣等感、優越感、高慢さといった悪がある時、それらを通して悪魔は私の中に入ってきて、私を支配しようとするのです。鉄と磁石が引き合うように、内なる悪と外の悪が引き合うのです。死体のある所には禿たかが集まるのです。悪や罪は自分の周りではなく私の中にあることを認めなければなりません。しかし最初のアダムが神に背いたことをエバの責任にし、エバは蛇の責任にしたように、悪の起源が自分にあることを人は認めようとはしません。そして「あの人が悪い、この人が悪い、社会や親や、教会が悪い、神が悪い」と言うのです。

今アメリカではアルコール依存症の親を持つ子供が親に訴訟を起こすことが増えているようです。子供は親に「自分がこうなったのはお前のせいだ。謝罪しろ」と言います。親は子供に「自分たちは精一杯、子育てをしてきた」と言います。親子で主張が食い違うのです。講師の西川先生は子どもには「あなたが苦しいのは分かります。でも親の謝罪が必要なわけではありません。人は変わりません。謝罪がなくても前に進むことはできます。」と言うそうです。親には「子供の記憶は尊重してあげなければなりません。その上で、自分はあなたを愛していると伝えましょう。」と言うそうです。『記憶は嘘をつく』という本があります。人間の記憶と云うのはいい加減なものらしいのです。脳は苦しみの理由を捜そうとしてストーリーを作り上げるからです。自律神経が病むと、部屋の中に誰かがいるように感じるらしいです。脳がそうやってストーリーを作り納得させるそうです。心なごむ会を作られた方でNさんという方がおられました。彼は「母親にお弁当を作ってもらったことがない」と、大人になるまでずっと思っていました。そこで内観療法をして過去を思い出してみると、6日目に急に「母親が台所に立って自分のお弁当を作っている映像が見えた」そうです。記憶は嘘をつくのです。

自分の外に問題があると言って、外に向かって怒りを向け、一生を無駄に過ごすのではなく、自分の内側にも問題があることに気がつき、自分が変わることに人生の時間を使いたいものです。

③【キリストの愛に満たされ恐れに打ち勝とう】

私たちが楽園に入った強盗を真似るとしたら何が出来るでしょう。

(1) 彼は十字架につけられ身動きもできず、死期も迫っていました。もう何もできません。隣人を愛するという良い業も、献げ物もできません。しかし強盗は「我々は自分のやったことの報いをうけているのだから当然だ」と言って、自分の罪を認める心を神様に献げたのです。ダビデは詩篇51篇で「もしいけにえがあなたに喜ばれ、焼き尽くす献げ物が御旨にかなうのなら私はそれをささげます。しかし、神の求めるいけにえは打ち砕かれた霊。打ち砕かれ悔いる心を神よ、あなたは侮られません。」(18~19)と祈りました。神が求める献げ物は、打ち砕かれた心、罪を認める心なのです。もし皆さんが今日、悔い改めを献げなければ、いかなる奉仕や献金をしても受け入れられないのです。

(2) さらに彼は「この方は何も悪いことをしていない。」と言って、イエス様を正しい方であると告白し、「イエスよ、あなたの御国においてになるときは、私を思い出して下さい」と言って、この世は彼の国であることを告白しました。「私を思い出して下さい」というのは、「あなたの生き方を真似ようと思った私の決断を思い出して下さい」ということでしょう。彼はイエス様を王として認め、彼の民となったのです。

今、世界の情勢を見る時に、恐れが人々を支配しているのが見えます。一番恐れにとりつかれているのはイスラエルです。次にロシアであり、アメリカです。恐れると、自分の周りの国が自分を脅かすのではないかという妄想に取りつかれて過剰に相手を攻撃します。犬が吠え、噛みつくのと同じです。恐れ自体は悪いものではありません。神を正しく恐れることは必要です。しかし神から目を離し、この世や自分を見て恐れる時、悪魔がその恐れを用いて破壊行動を起こさせるのです。カインがアベルを殺したようにです。キリスト教徒と言われる人たちが恐れに取りつかれ、悪魔の道具となっているのです。情けないことです。これが偶像崇拝の恐ろしさです。この恐れにどうやって私たちは勝てば良いのでしょうか。不安や恐れは伝染します。恐れを持っている人間は、恐れている他者を安心させることは出来ません。私たちが恐れをキリストに向ける時、それは消えてゆくのです。キリストは十字架刑の上で肉体の痛みは感じていましたが、恐れはいっさい感じているようには思えません。「愛には恐れがない。完全な愛は恐れを締め出します。」(Iヨハネ 4:18) 完全な愛とは神キリストの愛です。キリストの愛だけが、人に平安を与えます。

● 3月8日にクリスチャンの石丸昌彦精神科医を講師にお迎えして「安心の源～不安と孤独を越えさせるもの～」というテーマで講演会を持ちました。石丸先生のお母様は高齢になってから「私、最近死ぬ気がしないの」と言い、「死ぬ時になったらイエス様が何とかしてくださる」と言われたそうです。幼子は、母親のイメージがしっかり自分の内に出来上がることによって、親から離れる不安を乗り越えることができるそうです。

同じことが私たちにも言えるのです。パウロは「**生きているのは、もはや私ではありません。キリストが私の内に生きておられるのです**」(ガラテヤ2:20) といひ、「**私の子供たち、キリストがあなたがたの内に形づくられるまで、私は、もう一度あなたがたを産もうと苦しんでいます。**」(ガラテヤ4:19) と言っています。パウロはキリストが自分の内に満ちて働いているのを感じることができるよう、キリストと一体でした。ノアが一生かけて箱舟を作ったように、自分の中にキリストを形作りなさい。聖餐を頻繁に食べ、キリストの声を聞いて従い、キリストの霊に満たされ、いつもキリストの思いを思い、地上にいても天上にいるかのように生きるのです。そうすれば恐れは消えてしまうでしょう。キリストがからし種ではなく、大木のように成長することを祈ります。